

「**真実を伝える『古事記』の世界**
～四隅突出型墳丘墓を説く～」を聴いて

聴講日：R 3.5.8
むきばんだやよい塾第22期

はじめに

『古事記』は、ヤマタノオロチの居所と所業を「是高志之八俣遠呂智、毎年来喫」と伝えます。オロチは高志から毎年出雲の地にやって来ては娘を喫するというのです。出雲から遠く離れた高志(越＝北陸)との関係を、『古事記』の神話は語っています。『古事記』に出雲を舞台にした神々の動静に関する神話が多く占められているのは、出雲の弥生時代から古墳時代にかけての出来事を伝えているのではないのでしょうか。

弥生時代の墳墓のなかで四隅突出型墳丘墓と呼ばれる特異な形をした墓があります。これは、長方形の四隅が飛び出した糸巻きのような形をした墓で、出雲地方を中心に越前や越中にまで分布域を広げ、約百基あまりが築造された出雲世界を代表する墳墓です。『古事記』が語る出雲神話の多くは、日本海沿岸を舞台にしていますが、この地域には、この四隅突出型墳丘墓が分布しており、出雲神話が伝えるオオクニヌシの活動域と見事に符合しています。日本海を通じて、山陰と北陸の地域首長たちが四隅突出型墳丘墓という独特な墳墓を表示シンボルとして、同盟関係を築いていたことを『古事記』は伝えているのではないのでしょうか。

多くの古代史や考古学の先生はこのことを認識していますが、直接的に結びつけるのはあまりにも危険で、躊躇すべきと考えています。しかし『古事記』が『日本書紀』にない出雲神話を多く語っていることは、四隅突出型墳丘墓の分布領域が『古事記』に反映されていると考えます。

『古事記』とは日本最古の歴史書で、壬申の乱に勝利した天武天皇が命じ、和銅5(712)年、元明天皇の時に完成した書物です。稗田阿礼が暗誦した事柄を太安万侶が要約して漢文体でまとめ、推古天皇の時代までを上・中・下の3巻に分けて記しています。都が平城京に移って2年後、日本が律令国家として歩み始めようとしていた時期です。『日本書紀』が中国の歴史書を手本として約40年かけて編纂された30巻からなるのに対して、『古事記』は僅か四ヶ月で仕上げられた3巻からなる書物です。

一方、元明天皇の時(713年)、各国に『風土記』の編纂が命じられ、出雲・播磨・常陸・肥前・豊後の写本が今に伝わり、出雲はほぼ完全な形で残っています。その『出雲国風土記』の巻末には編纂者や完成日時も記されており、責任者の国司や執筆した郡司は記紀を知っていて、風土記の内容が記紀と合致していないと分かっていたはずで、しかし合致しないままの形で今日まで伝わっていますし、国引き神話は風土記にしか語られていません。

昭和時代後半までは「出雲大社にふさわしい巨大な遺跡が出雲にはないため、『古事記』が伝える古代の山陰は作り話・虚像であるというのが、古代史研究者の意見でした。しかし、大量の青銅器の発見や、巨大建造物であったことを示す出雲大社神殿の発掘調査などにより、古代の山陰の実像が少しずつ明らかになってきました。

古事記が語る神話の世界

“スサノオのヤマタノオロチ退治”は『日本書紀』にもありますが、“因幡の白兔”、“伯耆の焼け石”、“オオクニヌシの国づくり”、“アマテラスへの国譲り”は『古事記』にのみ語られている神話です。

“因幡の白兔”は、スサノオの6代後に、オオクニヌシが生まれ、80柱の兄弟とともにヤガミヒメを妻にしようと因幡に出かけました。兄たちにいじめられた兔を助け、兔から「ヤガミヒメと結ばれるのはあなたですよ」と告げられ、そのとおりにヤガミヒメを娶った神話で、因幡を活動領域としています。

“伯耆の焼け石”はヤガミヒメを末弟(オホアナムチ)に奪われた兄たちは、オホアナムチを殺すため伯耆国の手間山に呼び出し、真っ赤に焼けた岩を抱かせて死なせます。母神の力で生き返ったオホアナムチは、再び兄達の謀で死に至りますが、またしても生き返り、スサノオの住む根の堅州国へ逃れます。ここでは伯耆が活動領域です。

“オオクニヌシの国づくり”では、スサノオのいじめに耐えたオホアナムチは、葦原の中つ国を治める許しを得て、オオクニヌシと称するようになります。オオクニヌシは、海からやってきたスクナビコナと協力して、国の経営を安泰なものにしようとしました。しかし、スクナビコナは志半ばで常世国に去ってしまい、オオクニヌシは嘆き悲しみますが、国作りを進め、その勢いは遠くに広がっていきました。この神話の活動領域は出雲から北陸に及びます。

“アマテラスへの国譲り”では、アマテラスの使者がオオクニヌシを訪問し「国譲り」を迫ります。息子コトシロヌシは「国を譲ります」といって隠れてしまい、オオクニヌシは立派な館を建ててもらふことを条件に国を譲ることとなります。しかしオオクニヌシの子タケミナカタは反対し、アマテラスの使者タケミカズチと争って敗れ、科野国の州羽(諏訪)に逃げて鎮座し、諏訪大社(信濃一宮)に祀られました。活動領域が信濃まで伸びています。

考古学が語る古代の山陰

近年、発掘調査によって古代の山陰の実像が明らかになってきました。昭和59年7月、神庭荒神谷遺跡で358本もの銅剣が出土しました。これは、それまで国内で見つかった銅剣の総数を上回る大量の一括出土でした。翌年には7m離れた同じ高さ(標高22m)で銅鐸6個と銅矛16本が伴って出土しました。現場はすごい急斜面で、試掘抗が少し逸れていたら見つかりませんでした。

平成8年10月、大原郡加茂町の山中で大量の銅鐸が工事中に偶然見つかりました。発見のきっかけとなった工事作業で埋納抗は大半が失われていましたが、39個のうち、わずかに2個が元の位置を留めていました。ヒレを上下にした銅鐸お決まりの埋納方法で、2個の銅鐸はお互いの下部を向かい合わせて納められていました。

古代出雲文化展は、『古事記』に語られる出雲神話の実相を、近年新発見の荒神谷の遺物などで示し、『古事記』が語る出雲世界は虚像ではなく、語られているとおりの豊かな出雲であったことを紹介する目的で企画され、平成9年に東京を皮切りに開催されることになりました。プロジェクトは平成元年から始まり、緻密に組み上げられたそのタイミングで加茂岩倉の出土がありました。発見された39個の銅鐸は、まさに古代出雲の実相を物語るに相応しい出土品であり、これを使わずして文化展の成功はありえないとの思いで、わずか2ヶ月で出品が決定されました。

四隅突出型墳丘墓とは、長方形の墳丘の四隅が突出した弥生時代の墳丘墓で、中期後葉から後期末頃にかけて、主に出雲と伯耆を中心に分布します。四隅がわずかに突出する初源期の墳墓が、中国山地の三次地方と日本海沿岸部の出雲平野に出現します。突出部は時期が下るとともに発達し、石見(順庵原1号墓)や東伯耆(阿弥大寺墳丘墓群)では長く伸びます。後期後葉になると巨大な墳丘をもち、突出部が肥大化した大型の墳丘墓が現れ、出雲文化を象徴します。突出部周辺から出土した土器は底が筒抜けになっており、供献用の土器と考えられます。

阿弥大寺墳丘墓群には墳丘墓が三つあり、1号墳が17.8m、2号墳が7.8m、3号墳が8.8mになります。三つの墳丘墓の配列には規格性が見て取れます。他の多くの墳丘墓は丘陵上にありますが、阿弥大寺墳丘墓群だけは河川に近いところにあり、立地が全く異なっていることが特徴のひとつです。墳丘墓は山肌を削って平坦部を作った上に造営されていますが、突出部のうちひとつだけ山肌から直接踏み渡れる狭い距離になっているので、ここだけが通路であることがわかります。

洞ノ原墳丘墓群は、眼下に弓ヶ浜半島を望む標高約110mの丘陵にあり、30m四方ほどの範囲に全部で18基以上の墳丘墓が密集しています。このうち、四隅突出型墳丘墓は11基ありますが、中でも2号墓は、突出部がほとんど発達しておらず、弥生時代後期の初めに遡る山陰地方最古の四隅突出型墳丘墓です。墳丘墓群はその後、約100年にわたり造り続けられたので、突出部が次第に大きくなる過程がよくわかります。また、他に例のない一辺が1.5mほどの小さな墳丘墓が13基以上、大きな墳丘墓を取り巻くように所在し、子供の墓ではないかという説もあります。

西谷墳丘墓群は、墳丘を持つ墓だけでも27基が密集し、特に弥生時代後期～終末期に造られた6基の四隅突出型墳丘墓は、出雲の権力者たちの墓として全国的に有名です。墳墓群の中で特に巨大な規模を持つ2号墓、3号墓、4号墓、9号墓は、弥生時代に出雲を支配した王たちの墓と考えられます。墳丘はどれも斜面が貼石でおおわれ、裾まわりにも石敷きや石列がぐるりとめぐっていました。

3号墓はここに造られた最初の王墓で、弥生時代後期後葉のもので、突出部を含めた規模は約55m×40m、高さ4.5mです。裾まわりの石列は2列です。島根大学を中心とした調査団によって発掘調査され、鉄剣やガラス勾玉、大量の土器(吉備、北陸系の土器を含む)などが発見されました。

2号墓は、3号墓の次の代の王墓です。大部分が破壊されていましたが、発掘調査で巨大な墳墓であったことが判明しました。突出部を含めた規模は約50m×35m、高さ3.5mです。裾まわりの石列は2列です。ガラス腕輪や、葬儀に使用した土器(吉備の土器を含む)などが発見されています。

焦点を四隅突出型墳丘墓の‘突出部’に絞ってその多様性をみると、殿山38号墓(広島県三次市)のような中国山間部の墳丘墓では僅かに突出していますが、阿弥大寺墳丘墓群(倉吉市)のように山間部に至る中山間部では優美に伸びだし、宮山4号墓(島根県安来市)のような日本海沿岸部の場合では、大きく肥大化しているのが確認できます。この序列は時間の流れとも一致しています。

次に墳丘の貼り石に注目してみると、中国山間部の陣山墳丘墓では、貼り石のみか、それに墳丘裾部に縁石が廻る形状ですが、瑞穂町順庵原1号墓では、貼り石をして墳丘裾部から離れた位置に立石或いは貼り石より著しく小さい立石が廻る形状か、或いは、貼り石を施した墳丘墓に敷石帯を設ける形状です。安養寺3号墓では、貼り石を施した墳丘裾に、敷石帯があり、立石があり、また敷石帯があり、立石があつて墳丘墓の空間をクローズした手の込んだ作りとなっており、本来の形から離れ、本来の機能を失いながら華美なものとなっています。

四隅突出型墳丘墓の分布をみると出雲・安来・松江に集中し、越前や越中にも展開していますが、その中間地帯には分布していません。沿岸部においては船で行き来するため分布が飛ぶことがあります。

分布を時間的に追ってみると、中期後葉から中国山間地の出雲市あたりに四隅突出型墳丘墓が現れます。それ以前は方形貼り石墓でそこから四隅が突出してきています。阿弥大寺墳丘墓や洞ノ原や順庵原は後期前葉になります。そして出雲文化を特徴付けると紹介される西谷や宮山などは一番最後になります。決して出雲で連綿と続いているわけではなく、突如大型のものが出てますが、その前の段階で因幡の西桂見でも大型のものが現れてきています。北陸に四隅が出現するのの後期後葉で古い時代ではありません。

弥生時代の玉作

弥生時代の玉作遺跡は、これまでに全国で127遺跡が知られています。このうち、いち早く弥生時代前期に玉作りを始めたのは山陰の長瀬高浜遺跡(湯梨浜町)と西川津遺跡(松江市)です。両遺跡は、山陰で早くに稲作が伝わった場所であり、稲作とともに半島から玉作りも伝わったと考えられます。

弥生時代中期になって玉作遺跡は、北陸、近畿に広がりますが、後期になると近畿では遺跡は減少し、山陰と北陸に濃密に分布するようになります。弥生時代後期末には北部九州に松江市の花仙山から産出する碧玉が、製作技法とともに持ち込まれます。北陸産のヒスイは、硬玉と呼ばれて珍重され、特に勾玉作りに用いられ、青谷上寺地遺跡や出雲大社境内から出土しています。北部九州では、首長墓からヒスイ製勾玉が見つかっており、被葬者の権力を示す威信材として重要な遺物です。

弥生墳墓に副葬される玉のなかに水晶製の玉があります。山陰地方では副葬品として出土していませんが、弥生時代中期後葉から後期にかけて、水晶製の玉作遺跡が他地域にくらべて多く発見されています。特に、鳥取県において青谷上寺地遺跡をはじめ水晶製玉作遺跡が集中していて、山陰は弥生時代全期を通じて、玉作りの技術伝統を継承してきた地域といえます。

玉作り集団は四隅突出型墳丘墓を墓制としており、山陰・北陸に分布しています。また山陰では弥生時代の最初から玉作りの技術があり、その素材に北陸糸魚川のヒスイを求めました。これはオオクニヌシのヌナカワヒメ求婚に符合しています。このように『古事記』の出雲神話に語られるオオクニヌシの活動領域と、四隅突出型墳丘墓の分布と変遷という考古学的事実が符合しているのは、玉作り技術(山陰)と素材の原産地(北陸)の関係という歴史的事実を『古事記』が伝えているのではないのでしょうか。